

「言語博物館」を概念とした寺子屋式複言語教育の可能性

—小学生向けの言語への目覚め活動の実践研究—

クロス ルベン（琉球大学）

1. はじめに

文部科学省が平成29年7月に告示した小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編に「学校の創設の趣旨や地域の実情、児童の実態などによって、英語以外の外国語を取り扱うこともできる」(p. 54, 137)と明記されている。但し、この「児童の実態」に関して日本の小学校では英語圏以外の外国につながる児童の増加や英語以外の外国語に興味を持つ児童もいるという貴重な機会を考慮に入れず、事実上全国の殆どの小学校の外国語活動・外国語の授業で英語のみが単刀直入に紹介されている。さらに、放課後に英語に触れるあらゆる機会を加えると、多くの児童は小学生のころから「外国語＝英語」という思考の保持に影響を受けていると考えられる。

この背景を踏まえ本研究は、英語とその他の言語を同じ価値として扱う「言語博物館」を概念とした複言語教育を用いた学習環境において、どのような変遷が観察されるのかを調査した。研究者は指導者として古民家で小学1～4年生(≒9名)を対象に週末に週1回(≒3時間)に約2年間ボランティアとして実験的に実施してきた。多言語を経験した指導者は、学習者の複言語レパートリーと柔軟な言語態度を育成するために3つの側面—多言語・言語そのもの・言語以外のもの—が含まれ、これらは普通の授業や特別企画(例:保護者と一緒に県内遠足)を通して行われた。第一の分野「多言語」は、「紹介」、「選択」、「集中」という課程を通して、様々な言語を紹介し、学習者が関心を持つ言語を10まで選択し、その以降自分の意志で学習を進め、指導者はその学習を普通の授業や特別企画を通して支援する。この側面のひとつと特徴としては、学習者は指導者が経験のない言語(例:ゾンカ語)も選択ができ、この場合は指導者と一緒に調べる。第二の分野「言語そのもの」では、音声学から神経言語学まで言語学諸分野を通じて言語自体について多側面的に考える(例:児童は粘土で楔形文字で自分の名前を書くことで言語と歴史の関係について考える)。第三の「言語以外のもの」では、前述の1と2の補助として、児童の関心を更に高めるために、指導者又は学習者の提案で様々な内容(国旗、歴史、哲学、科学、世界の通貨、衣装等)に関する活動も行った。学習者と保護者への調査、観察等で得られた2年間の成果を下記にまとめ、今後の活動と研究の発展に繋げることを期待する。

2. 学習者調査の結果

2-1 楽しかったこと:学習者の間に遠足(海外系の飲食店や行事参加)や教室内で様々な遊び(食事会、誕生日会、外国語映画鑑賞等)が特に楽しかったという発言が多かったことから、複言語教育において教室で行う座学だけでなく、教室内外で楽しい活動を導入することの重要性がうかがえる。また、学習者の一部は特定の外国語で感じた達成感にも言及した(例:「中国語の検定を合格したから」、「スペイン語の挨拶がスムーズに分かったこと」等)。

2-2 楽しかった言語:言及される理由の中に親しみ(「スペイン語は長くやったから」、「最初にやった言語はフランス語だから」、「ポルトガル語はスペイン語に似てるから」、「先生とトルコ語の挨拶をしてるから」)、達成感(「スペイン語は覚えやすくて、スピーチできたから」、「中国語は検定を合格できたし」、「英語頑張ってシールもらったから」)や関心を引いた文字(「ギリシャ語の文字が面白い」、「アラビア語は色んな文字があるから」等)があった。

2-3 語学継続意志:学習者全員は将来言語を学び続けたいと示し、「将来海外に行ったら役に立つ」、「色んな国の人と話したい」、「外国語が話せたらカッコいい」、「やっぱり言語が好きだから」のような理由があげられた。

2-4 将来学びたい言語:学習者によって回答した言語数が異なる(1～7)。あげられた理由としては、特定の国が好き・行く予定だから(例:フランス語、中国語、「サウジアラビア語」)、その言語を使う国が多いから(例:スペイン語、英語)、達成感(例:「スペイン語は初めてスムーズ言えた言語だし」)、2-2 同様、楽しかったから(例:トルコ語とアラビア語)。将来学びたい言語の殆どは2-2の「楽しかった言語」の内容と部分的又は完全に一致していることが多い。

2-5 学習者は自分と他の学習者との関係において、特定の言語との関係性、言語能力や言語以外の特技に言及する独自性(アイデンティティ)の形成が観察された(例えば、「〇〇君と言えばポルトガル語が得意」、「フランス語と言えば〇〇君」、「〇〇ちゃんは国旗が好き」、「〇〇君は哲学が得意」等)。

3. 保護者調査の結果

3-1 言語・言語以外の行動変化:自宅で積極的に知っていることについて話す(歌う、多言語で自己紹介する、手話を披露、お願いするときに外国語を使う、哲学について話す等)、質問する(外国、食材・お菓子の生産地、語源について)、その他の行動をする(曲を楽しむ・踊る、Duolingoのような語学アプリを毎日やる)。

3-2 親や親子関係への変化:一部の親の視野や関心が広がり、積極的に児童を支援したい気持ち、一緒に語学に関わるが増えたと示した(外国語曲で児童と踊り、海外の国歌を歌い、児童の質問に答えられない時に一緒に調べる等)。また調査以外にも親子で語学アプリの使用、外国語弁論大会の練習、外国語教材の購入や外国語検定試験の受験申込などのような支援が観察された。

3-3 評価:全ての保護者は講座に対する総合的に良い評価を示し、長期的に通学させたい願望を示す声もあった。一方、他の活動や家庭状況等による学習者の低い参加頻度が言語に対する関心度を減少させるという懸念もあった(例:「語学遊びに参加した頃は言語学者になると言っていました、参加できなくなってからは言わなくなりました」)。